［追手門学院大学］

宮本輝ミュージアムと追手門学院大学

真銅 正宏　追手門学院大学学長

1 宮本輝が一期生であることの幸福

著名な作家が、ある大学の卒業生であることに加えて、その一期生である場合は、珍しいのではないか。

宮本輝は、1966年に茨木市安威に開学した追手門学院大学をモデルとして、『青が散る』の中に、主人公椎名燎平が通う大学を次のように描いている。

その学院は小学校から高校までの一貫教育を目玉に、おもに金持の子弟の通う私学として八十年の歴史を誇っていたが、大学だけは持っていなかった。学校経営陣の積年の念願が叶って、いよいよ大学開校のはこびとなり、文学部、経済学部あわせて七百名の第一期生を募集したのである。

そして燎平たちは、テニス部を創部するに際し、テニスコートを手作りすることから始めるのである。

このとおり、一期生というのは格別である。さらにこのことが、『青が散る』の世界をも魅力的に彩っている。

2 宮本輝ミュージアムという幸福

卒業生である著名な作家を顕彰する施設を、たとえ大学が建設することを希望しても、必ずしも容易に叶うわけではない。そのためには様々な条件が整う必要がある。

追手門学院が創立120周年を迎えることの先行記念事業として、2005年5月、大学附属図書館の一角に宮本輝ミュージアムが開設された。以来、学生教職員を含めて、延べ約15万人が来場している。

このミュージアムには、氏の理解と多大なる協力を得て、サインや落款の入った著書を含む各種著作物、自筆原稿や万年筆などの愛用品、各種のAV資料などが収蔵さ

れている。常設展示は氏の文学を多面的に知ることができるように工夫され、加えて半期ごとに企画展が催されてきた。その数は29回を数える。

２００５年5月21日に開催された宮本輝ミュージアム開設記念セレモニーで、宮本輝は、「卒業生として大変光栄なことです」と述べ、「講演会」においては、「記念館は亡くなった方のために作られることが多いですし、今の時点で記念館はおこがましいと思い、ミュージアムと名称を変えていただきました」「ミュージアムを見せていただいたところ、展示スペースの上方にはまだまだ空間がありました。これからもがんばって書けといわれているようだ」と述べている(『OTEMON PRESS』No.19、２００５年7月発行)。

例の如く「照れ」とユーモアが込められると共に、卒業生としての思いも示された、実に有難い言葉である。

3　宮本輝の作品中に本学が登場するという幸福

『青が散る』とともに、父をモデルとした氏のライフワークである『流転の海』シリーズの最終巻『野の春』にも、本学が実に丁寧に描写されている。

そこが物語の舞台であることにより、普段の生活場所が特別なる「トポス」に昇格する。作品に描かれるとは、単に写されるのではなく、多層性を持った意味ある場所へと移されることを意味する。日本の古典文学における「歌枕」がその代表である。吉野山の桜は、西行の歌に誘われて後世多くの人が訪れ、その一人である芭蕉が、句を詠んだために、さらに多くの人が訪れることとなる。

本学にも宮本輝を慕うファンが多く訪れている。その中には、次世代の文学者が含まれているかもしれない。

この宮本輝ミュージアムが、現代および次代の「歌枕」となることを期待したい。

[写真]宮本輝ミュージアム

［立教大学］

乱歩の生きた空間で大衆文化を学ぶ

金子 明雄　立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター長・文学部教授

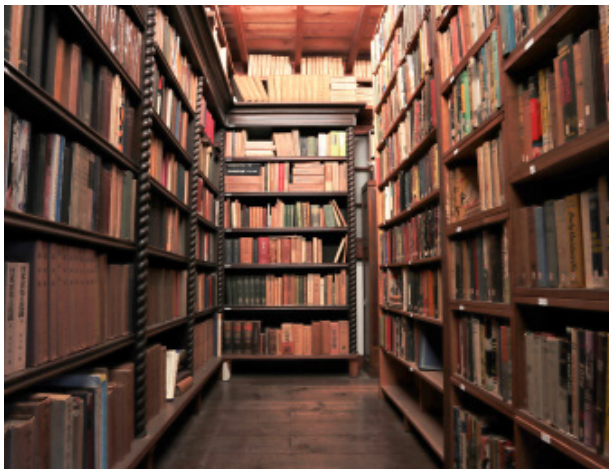
日本を代表する探偵小説作家・江戸川乱歩（本名：平井太郎、１８９４―１９６５）は生涯46回引っ越しをしたとされるが、最後の家になったのが、立教大学の北側に隣接した豊島区西池袋３丁目にある旧江戸川乱歩邸である。この３００坪余りの敷地に２階建の土蔵のある木造平屋住宅を、家賃90円で乱歩が借りたのは１９３４年のこと、その後１９４８年に土地と建物を購入し、１９６５年に逝去するまでの31年間に亘ってこの家で過ごしている。引っ越し好きの乱歩がこの土地と家を気に入った理由は定かでないが、その間、１９５７年に１階に応接間を配置した２階建洋館とご子息宅などを増築する改築がなされており、乱歩没後の１９７６年にも改築が行われ、現在に近いかたちになった。

立教大学は、乱歩のご子息隆太郎氏が教員として勤務された縁などから平井家との関係を深め、２００２年に土蔵を含めた建物と土地、旧蔵書（和書１万３０００冊、洋書２６００冊、雑誌５５００冊、和本３５００冊ほど）および、さまざまな物品や資料を一括して引き受けることになり、２００３年に豊島区指定有形文化財となった土蔵の復元・補強を経て、２００６年に立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターをこの地に立ち上げる。同センターは、旧蔵書を中心とする乱歩関連資料の整理、保存、公開を進めるばかりでなく、土蔵を含めた旧乱歩邸の公開やシンポジウムの開催などを通して、乱歩を中心とする探偵小説（ミステリー）への幅広い関心を醸成すると共に、探偵小説に限定されない大衆文化全般に関わる研究の発展に貢献することを目的として、研究雑誌『大衆文化』や『センター通信』を発行して、大衆文化研究の情報センターとしての役割を果たして

いる。

大衆文化研究センターの特質は、単に乱歩の旧蔵書を所蔵しているばかりでなく、土蔵をはじめとして、もともとそれらが収められていた独特の環境とのセットで保存していることにあり、「幻影城」という言葉によって喚起される、乱歩の広大で奥深い知的世界を書物を中心とする情報の面と土蔵などの建築の両面から再構築する役割を担っている。今日においても幅広い読者を有し、映像作品や舞台作品となることも多い乱歩作品だけに、それらが生み出された環境への関心も高く、週2日の公開日にはコンスタントな来場者があり、洋館応接間などを中心にフォトジェニックな空間を撮影等に利用したいという希望も数多く寄せられている。乱歩や大衆文化に興味を持つ学生にとっても、この場所で乱歩資料に接することに特別な価値や魅力があることはいうまでもない。

乱歩関連資料の多くは、立教大学図書館の検索システムから調べられるかたちになっており、これまで通り資料の利用を補助する業務を続けるのは当然だが、まだ整理の進んでいない資料もあり、それらの資料をデジタル化してWebなどで公開していく事業を進めることや、乱歩資料を所蔵する全国の機関や、乱歩以外の探偵小説家・大衆文学作家の資料を所蔵する資料館等と連携して、大衆文化領域でのネットワークや人間関係を明らかにする企画などを展開するのが今後の目標である。



[写真]旧乱歩邸 土蔵内書架

[写真]旧乱歩邸 土蔵外観

［早稲田大学］

文化の発信地としての「文学の家」

西尾 昌樹　早稲田大学国際文学館事務長

はじめに

早稲田大学国際文学館（通称：村上春樹ライブラリー）は、2021年10月1日に開館した。卒業生でもある作家の村上春樹さんの所蔵資料の寄贈・寄託を受け、新設された「文学の家」（The Waseda International House of Literature）である。

新宿区にある早稲田キャンパスの既存の校舎が、建築家で本学特命教授の隈研吾さんの設計でリノベーションされた。地下1階地上5階にギャラリーラウンジ、オーディオルーム、スタジオ、階段本棚、展示室、カフェ、研究書庫、研究室、事務スペースがコンパクトに配置されている。大規模な改装には多額の費用が必要であったが、柳井正さん（株式会社ファーストリテイリング代表取締役兼社長）のご支援により実現することができた。

1　居心地の良い空間

現在は、感染症対策のため90分間4シフトの予約定員制をとっており、広く一般の方や教職員、学生100～150人が毎日訪れる（地階は出入り自由）。1階のギャラリーラウンジには、村上春樹さんの著作、様々な言語への翻訳がならべられ自由に手に取って読むことができる。また1階から地階への階段の両側には本棚が広がり、村上作品を起点にしてテーマ別に書籍が配架され、思いがけない本との出会いの場となっている。地階にも書棚は広がり、カフェも併設されている。2階の展示室では、「音／言葉を刻む、ジャズと文学」展を開催中である。

SNSで来館者の感想を拾ってみると、次のような言葉があふれている。

「本を読んだり、ジャズを聴いたり、ぼーっとしたり、

最高すぎる」「何時間でもいたい。90分の制限時間は短い」「いくらでも本が読みたくなる空間」「木をふんだんに使った空間が心地よい」「ここに住みたいくらい」

隈研吾さん独特の木を多用した開放的な空間と多くの書籍と音楽さらにカフェの融合が想定以上の効果を生んでいるようだ。これまでのキャンパスにはなかった、ゆったりと文学と音楽に没入できる場所。その居心地の良さについては、評価いただいているようである。

2　単なる記念館ではないオープンな場所に

早稲田大学国際文学館は、①村上春樹文学研究②国際文学研究③翻訳文学研究を柱に世界中の文学研究者や愛好者が集う研究拠点であり、一般的な著名作家の記念館の枠を越えたオープンな場所、文化の発信地となることを目指している。このことは村上春樹さんが望まれていることでもある。

文化発信の実践としては、昨年10月の開館以来、「Authors Alive! ～作家に会おう～」を連続開催し、村上春樹さん、小川洋子さん、川上弘美さん、伊藤比呂美さん、村田沙耶香さん、朝井リョウさん、堀江敏幸さん、マーサ・ナカムラさん、水原涼さんがこの場所で自作の朗読やワークショップを開催した。また、今年に入り、「WASEDA CAMPUS LIVE」と銘打ったコンサートを企画し、小澤征爾音楽塾、スガシカオさん、リチャード&ミカ・ストルツマンさん等ジャンルを越えたライブを実現することができた。これからは、学生を巻き込んだ様々な企画も検討していきたいと考えている。

[写真]洞窟のような階段本棚

[写真]内部を暗示するファサード